

## 楽曲解説

9/18 (月・祝) 第896回オーチャード定期演奏会

9/21 (木) 第112回東京オペラシティ定期シリーズ

解説=野本由紀夫

## 本日の演奏会について

ベートーヴェンの「ダブル3番」プログラムである。これはただ単なる数字のゴロ合わせではない。ピアノ協奏曲第3番も交響曲第3番も、同じ1803年に「英雄的様式」を確立した作品であり、それぞれのジャンルで時代を画する記念碑的な作品なのである。その意味では、ベートーヴェンが進むべき道を見出した、特別な意味をもった作品どうしの組み合わせなのだ。

名誉音楽監督のチョン・ミョンフンがメイン曲に『英雄交響曲』を選んだことも、東京フィルとの絆を感じさせる。というのも、15年前の2002年6月から翌年12月まで断続的に行われた、チョン・ミョンフン=東京フィルの「ベートーヴェン交響曲全曲演奏会」シリーズの第1夜は、まさに『英雄交響曲』がメイン曲だったからである。今回7月と9月の定期演奏会で演奏されるマーラーの交響曲第2番『復活』が東京フィルの歴史にとって運命的な作品であったように、『英雄交響曲』の選曲も、チョン・ミョンフンが東京フィルと築こうとしている新たな決意の表れだと感じられないだろうか。

じつはこの夏、チョン・ミョンフンはピアノ協奏曲第3番を、清水和音をソリストとして数回共演してきた。今夜のソリストは、16歳の天才少女イム・ジュヒである。いかにも筋肉質な清水の演奏と、ティーンエージャーのイムとの音楽性は、まるで違う。それにどのようにオーケストラを応えさせるのか。いろいろな観点から、じつに心待ちなコンサートである。

ベートーヴェン(1770-1827)

## ピアノ協奏曲第3番 ハ短調 作品37

ピアノ協奏曲の歴史にとっても、ベートーヴェンの創作にとっても、決定的な一歩となった作品。すなわち、「シンフォニックな独奏コンチェルト」の誕生である。後でも触れるが、オーケストラ・パートの充実ぶりは、ほとんど「交響曲」と呼べるほど。ピアノ独奏パートも、ただ華麗な演奏を繰り広げるだけでなく、交響的な音楽の、重要な作曲素材の主役を担う。

いわゆる、われわれが「ベートーヴェンらしい」とイメージするような、記念碑的なスケールの大きな音の建築物のことを、しばしば「英雄的様式」と呼ぶ。この協奏曲は、その英雄的様式を打ち立てた作品である。

この曲が生まれた背景には、3つの要因が考えられる。ひとつは、プロイセンのルイ=フェルディナント王子との出会いである。1796年、ベートーヴェンはプロイセンの首都、ベルリンを訪問し、ピアノの名手でもあったこの王子と知り合っている。このときに、なんらかのインスピレー

ションを得たらしく、このピアノ協奏曲を作曲し始めている。1800年に、一部の楽章は完成したらしいが、最終的な完成は1803年となる。

作品誕生の2つ目の要因は、新型ピアノの登場である。ベートーヴェンはこの協奏曲の書かれたまさに1803年、イギリスのエラール社からイギリス・アクションのピアノの寄贈を受けた。現在では当たり前になった、ひとつの鍵盤に対してそれぞれ3本の弦を張る方式や、シフトペダル(弱音ペダルとも呼ばれる、踏むと鍵盤機構全体が数ミリ横にズレて、ハンマーが叩く弦の数が減る仕組み)が装備されていた。

この新型ピアノで作曲したのが、あの『ヴァルトシュタイン・ソナタ』や『熱情ソナタ』、この協奏曲なのだ。協奏曲第3番の最後に頻出する最高音「ド」の音は、このエラール・ピアノではじめて出せるようになった音域だ。新しいテクノロジーが、ベートーヴェンのピアノ創作を変えたわけである。

そして、この協奏曲誕生の3つ目の要因が、「ハイリゲンシュタットの遺書」である。1802年10月、ベートーヴェンはウィーン近郊の田園地帯ハイリゲンシュタットで、遺書を書き残した。その遺書の内容は衝撃的だ。耳の病気が5年ほど前から自覚されていたこと、苦悩のあまり自殺まで考えたことが赤裸々に語られているからだ。

「自殺を引き留めたのは、芸術であった」。彼はこう述べている。ベートーヴェンが音楽芸術の究道者として生まれ変わった瞬間である。多くのベートーヴェン研究者が、この遺書を境に、彼の創作力が大爆発すると認めている。おそらく耳の病気に対して、吹っ切れたのであろう。こうして、画期的な作品、ピアノ協奏曲第3番が生まれたのである。

**第1楽章** 複雑なソナタ形式の楽章。ベートーヴェンに特徴的な、ハ短調の楽章である。オーケストラによる呈示部が延々と続いたあと、ピアノが劇的に登場する。

ベートーヴェンは、この楽章の最後のほうに出てくる独奏カデンツァを2種類残している。ひとつは64小節のもの、もうひとつは145小節のものだ。普通は、64小節稿が演奏される。

じつは1803年4月5日の初演はベートーヴェン自身がピアノ独奏を行ったが、そのときに彼の譜めくりをしたザイフリートによれば、独奏パートはほとんど白紙同然。まるでヒエログリフ(古代エジプトの象形文字)のような記号しか書かれていなかったという。現在演奏されている楽譜は、初演の翌年に弟子のフェルディナント・リースが独奏者を務めることになった際に書き下ろしたものだ。そのとき書かれたのが64小節のカデンツァなのだ。

カデンツァの後、ティンパニが第1主題の音型の一部を反復し、ピアノの壮麗な演奏とともに締めくくられる。

**第2楽章** 第1楽章のハ短調とは理論上ほど遠い、ホ長調の緩徐楽章。前の楽章とはまるで雰囲気の違い音楽を、ピアノ独奏が奏でる。オーケストラは、この楽章中ずっと弱音器を付けている。ところどころに短く挟まれるカデンツァ的なピアノのソロが美しい。この楽章は、突如の $ff$ (最強音)で終わる。

**第3楽章** ロンド形式とソナタ形式を融合した楽章。まずピアノの独奏から始まる(ハ短調、2/4拍子)。中間部(かつ展開部)はクラリネットで始まり(変イ長調)、ピアノに引き継がれる。ファゴットから始まる小フーガのあと、ハ短調の再現部になる。

しばらくするとハ長調6/8拍子に転じ、短いカデンツァのあと、勇壮に閉じられる。

[作曲年代] 1796-1803。ピアノ独奏パートは、1804年7月に完成。[初演] 1803年4月5日、ウィーンにてベートーヴェンのピアノ独奏で。

[楽器編成] フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部、独奏ピアノ

## 交響曲第3番 変ホ長調 作品55『英雄』

この交響曲は、フランス革命の英雄、ナポレオン・ボナパルト(1769-1821)と関係が深い。ベートーヴェンははじめ、彼に献呈するつもりで「シンフォニア・グランデ(大交響曲):ボナパルトと題して」とタイトルを付けていた(1803年に完成)。ところが、自由と平等の革命の闘士どころか、ナポレオンはみずから皇帝に即位してしまった(1804年5月)。

この知らせを聞いたベートーヴェンは「彼もただの野心家だったか」と激怒して、自筆スコアの表紙の献呈名を、穴が開くほど強い筆跡で消してしまった(1804年12月)。結局この交響曲は、「シンフォニア・エロイカ(英雄的な交響曲):ある偉大な人物の思い出を記念して」として出版された(1806年10月)。

音楽史上、記念碑的な交響曲である。1803年の作曲だから、さきほどのピアノ協奏曲の完成と同時期だ。前年に完成した、ある種モーツァルト(1756-1791)のDNAも受け継いだかのような交響曲第2番からも、ほとんど間を置いていない。しかしその信じがたいほどの作曲上の飛躍は、しばしば「エロイカの飛躍」と呼ばれる。

特に第1楽章における拡張されたソナタ形式は、これまでになく緻密で徹底的な「動機労作」によるもので、これにより「交響曲」というジャンルが、それまでの娯楽音楽から高度に精神的な内容をもった芸術の最高峰に位置づけられるようになった。

**第1楽章** 短い序奏をもつ、拡張的なソナタ形式の楽章。序奏は主和音をわずか2回打ち鳴らすだけだが、主要主題はその打撃和音を分散和音にすることで生み出される。呈示部が151小節なのに対し、展開部はなんと246小節もある。再現部は154小節、コーダが140小節で、全体のなかでの展開部の比重が異様に重いことが、従来にない特徴だ。コーダも規模と内容からいって「第2展開部」の機能を果たしている。

展開部は、すべての動機が組み合わさった驚異的な書法である。つまり、呈示部に出てきたいくつもの主題や動機が、いわばオールスター・キャストで「同時進行」するのだ。

再現部は、まるでホルンがフライングで、出る場所を間違えたかのようにして始まる。コーダは第2展開部と呼ぶにふさわしく、やはりこれまでの主題・動機が同時進行する。ホルンで始まるクライマックスは圧巻だ。

**第2楽章** 交響曲には異例の「葬送行進曲」による楽章。現在でも実際の葬儀でしばしば使われる。中間部は長調となり、故人の生前を偲ぶ回想シーンの音楽である。再び短調の葬送主題にもどり、やがて小フーガとなる。トランペットが「最後の審判」のファンファーレを強奏する。最後の最後に、第1ヴァイオリンで葬送主題が息も絶え絶えに回想されると、思いを断ち切るかのように、終止和音が余韻を残して終わる。

**第3楽章** 充実したスケルツォ楽章。変ホ長調の楽章なのに、オーボエで出てくるスケルツォ主題は、意表をついて変ロ長調である。次にフルートで出てくると、今度はハ長調。主調の変ホ長調がようやく確立するのは、トゥッティ(全奏)からであり、これは異例の調設定だ。

繰り返しを経て、有名なホルン三重奏のトリオ(中間部)となる。トリオ(中間部)をトリオ(三重奏)で演奏するという、ベートーヴェン一流の洒落だ。当時のホルンでは演奏するのが困難だった音まで使われている(東京フィルのホームページ(※)の動画も参照されたい)。再びスケルツォの音楽にもどり、短いコーダはティンパニ・ソロではじまる点が新しい。

**第4楽章** 「主題と変奏」にフーガが挿入された、きわめて独創的な楽章。この楽章は、1802年に書かれ、のちに「エロイカ・ヴァリエーション」と通称されるようになったピアノ曲「15の変奏曲とフーガ」作品35にもとづき、その中のいくつかをオーケストレーションしたものだ。

もっとも、その作品35の変奏主題も、もとをただせば「オーケストラのための12のコントルダンス」WoO14の第7曲、およびバレエ音楽『プロメテウスの創造物』作品43の終曲(ともに1801年)から取られた。

主題が少しずつ変奏されていくが、最初の小フーガは徐々に主題労作されていく。第4変奏のフルート・ソロは聴きどころのひとつ。2つ目のフーガは、バス主題の音程関係の上下方向を逆転させた「反行形」で書かれたフーガだ。

いったん音楽が停止したあと、テンポを落として木管アンサンブルによる第6変奏となる。徐々に音楽が盛り上がり、ホルン力奏が第7変奏だ。序奏部分がもう一度現れると、大クライマックスとなり、まさに英雄的にこの交響曲は閉じられる。

[作曲年代] 1803年 [初演] 1805年4月7日、ウィーンにて公開初演。ただし、私的初演は、1804年5月末から6月はじめごろに、ウィーンのロブコヴィツ邸で。

[楽器編成] フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

のもとゆきお(指揮・音楽学) / 桐朋学園大学助教授を経て、玉川大学芸術学部教授。研究にもとづく世界初演のオーケストラ指揮者。NHKテレビ「名曲探偵アマデウス」「ららら♪クラシック」、Eテレ学校番組「おんがくブラボー」番組委員ほか。鑑賞教育理論の第一人者として、全国各地の講演に呼ばれている。

※関連記事「ベートーヴェン / 交響曲第3番『英雄』の聴きどころ」は東京フィルウェブサイトからご覧いただけます

